

編集後記

本号では「シンポジウム：“患者にやさしい医療面接”から“こころを癒す精神療法”へ」と題する特集で5編の論文を掲載した。いずれも第108回日本精神神経学会学術総会（平成24（2012）年5月24～26日、札幌市）で同題にて開催されたシンポジウムの発表内容を論文化したものである。これらはシンポジウムの開催に先立ち、日本精神神経学会の学会誌「精神神経学雑誌」にて印刷体の形式で刊行するとして、編集委員長と学術総会会長の連名で執筆依頼され、終了後にシンポジストらが依頼に沿って原稿を入稿したところ、編集委員会より査読意見に沿って修正が求められた。筆者らは依頼論文に対し詳細な査読意見がつくこと、シンポジウムで検討していない内容への加筆修正が求められたことなどが想定外であったことなどを主たる理由として、同誌への掲載を取下げ、本誌「臨床評価」への掲載を希望し、編集長としてこれを受け入れたものである。学会誌編集長からは、編集委員長交代等による説明不足についての詫び状ともとれる内容の丁寧な書状がシンポジスト全員に郵送された。書状には、これまでシンポジウム論文と原著論文の査読に差があることが問題となっていたことからできるだけ緻密に対応することになった、今後、症例報告や原著論文の掲載を促進したい、との趣旨の説明であった。

このシンポジウムは、精神医療のあり方を検討する、特に、常識的な人間どうしのつきあいを医師患者間でまずは構築すべきこと、それにOSCEが寄与するかもしれない、などの問いかけをしたもので、科学的に検証された結果の発表とは性質の異なるものである。かつて同学会誌は、委員会活動報告など精神医療のあり方を問う議論がかなりの比重で掲載されたものだが、様変わりしつつあるようだ。学術総会シンポジウムの内容を学会誌に掲載することを編集方針とし、しかも査読を厳密にするのなら、due processとしては、編集委員はシンポジウムに出席して、その場で議論する必要があると思われる。本件は、過渡期における同学会の姿勢を表し大変興味深い。こうしたいきさつの詳細も想像しつつ読んでいただければ、幸いである。

（栗原雅直・編集長）